

昭和八年の夏から、私ども一家は苦樂園に建った新しい家に住むことになった。この家が、私にとって忘れることのできない、思い出の家となったのである。

苦樂園といっても、今はその名を知っている人は少ないであろう。大正のある時期には、一時、阪神間の高台にある別荘地、避暑地として、繁盛したことがあった。私どもが移り住んだころには、もうさびれていた。その代り、昔日の隆盛をしのぼせる、廃墟の趣きがあった。阪急電車の夙川で乗りかえ、支線の苦樂園口で降りる。当時のバスで十五分ぐらい——松林とたんぼの中を走ってゆくと、途中から坂道になる。六甲連山の東端に近い丘の中腹に、ちらほらと家が見える。それが苦樂園である。……新しい家は、見晴しが素晴しかった。心臓病で身体をあまり動かせない養父は、一日じゅう、南側の窓に近いところにすわって、遠くに見える海をながめていた。夕食後のひとときを、私たちは窓ぎわにならんで、遠くに点々ともって行く、西宮や尼崎の灯、走って行く電車のあかりを、あきずにながめたものである。

日曜日などには、私は苦樂園あたりを散歩した。妻は赤ん坊(長男)の世話に忙しく、家にひきこもりがちであった。家の前には桜の並木がづいていた。家から西南の方へ降りてゆくと、赤松の林の中に池がある。赤いれんがの古風な洋館が見える。苦樂園ホテルである。かつては、……文人墨客が、ここに足をとどめた時代もあったらしい。私があたりをさまよったころには、さびれきっていた。れんがの上に、つたかずらが生い茂って、人がいるかいなかわからないくらいであった。

家から東北の方へ向って坂を上ってゆくと、木立はまばらになり、白い岩はだが露出している。ながめはますます広くなってくる。丘を上りきった所に、大きな池がある。真青な水をたたえて、静まりかえっている。周囲の白い岩山との対照が美しい。

池の向うに、石造の建物が一つぼつんとある。円柱形の洋館である。一見、西洋の古城のような印象を受ける。その影が、池にはつきりとうつつている。私は小学校時代に愛読した、グリムの童話の世界にきたような思いであった。あの円柱形の洋館には、魔女が住んでいる。誘拐された王女が、あの中で眠っている。私はこんなことを空想して見たりした。円柱形の建物に近づいて見ると、入口のとびらもなくなっている。人の住んでいる気配はない。中には、ハイキングの人たちが残っていた弁当ガラが、散らばっているだけである。この洋館はホテルにするつもりで建てられたらしい。それが、とうとう完成せずに終わったものようだ。あたりには人影もない。私は二階に上って、しばらく、このエキゾチックなふんいきを楽しんだ。

五月になると、家のあたりは、満開のつつじで美しかった。十月には赤松の林の中で、松たけがとれたりした。——
苦樂園の散歩は楽しかったが、やはり私の頭の中に、新しい着想を呼び起してはくれなかった。

有名な室戸台風(昭和九年九月二十一日)——が過ぎ去って、急に涼しくなった。秋晴れの日がつづいた。二十九日になって、次男の高秋が産れた。長男はまだ一年六か月である。

私は、奥のせまい部屋で寝ていた。例によって、寝床の中で物を考えていた。大分、不眠症が昂じていた。いろいろな考えが次から次へと頭に浮ぶ。忘れてしまおうといけないので、まくらもとにノートがおいてある。一つのアイデアを思いつくごとに、電灯をつけてノートに書きこむ。こんなことが、また何日かつづいていた。

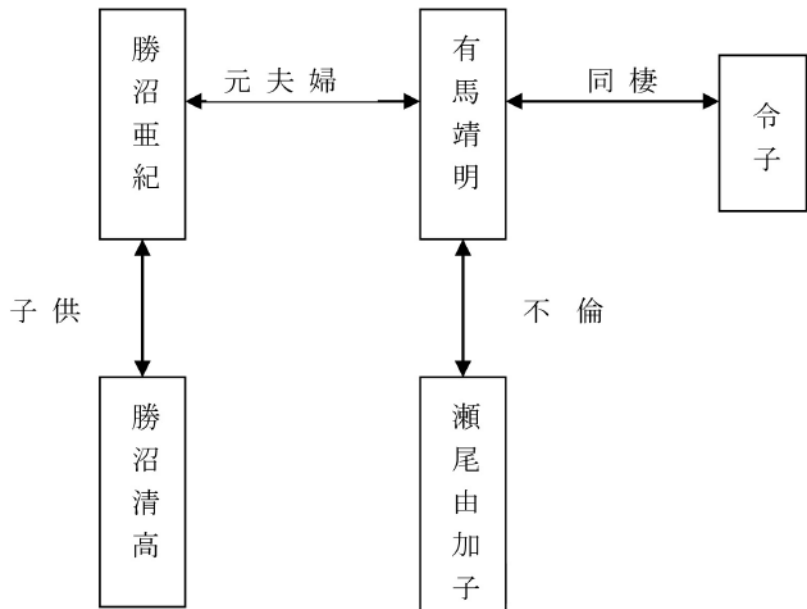
十月の初めのある晩、私はふと思ひあたった。核力は、非常に短い到達距離しか持っていない。それは、十兆分の二センチ程度である。このことは前からわかってきた。……この到達距離と、核力に付随する新粒子の質量とは、たがいに逆比例するだろうということである。こんなことに、私は今までどうして気がつかなかったのだろう。……それから間もなく、日本数学会の大阪支部の例会で、十一月は東京本部の例会で、新理論を発表した。仁科先生は直ちに、この理論に興味を持ち、私を激励された。

十一月の末までには、英文の論文を書き上げて、数物数学会に送った。こんなに早く論文が出来上ったのは、妻が毎日のように、「早く英語の論文を書いて、世界に発表して下さい」と勧めたからであった。

この時の私の気持は、坂路を上ってきた旅人が、峠の茶屋で重荷をおろして、一休みする気持にたとえることもできよう。この時、私は前途にまだ山があるかどうかを、しばし考えずにいたのである。

【解説】

わが国初のノーベル賞受賞者となった湯川秀樹博士が、50歳を超えて、これまで自分があるいてきた道を振り返った、27歳までの回顧録。苦樂園在住時代がとりわけ懐かしく記されている。物理学者としてもっとも重要な研究をしていた時期であった。



【解説】

運命的な事件ゆえに、愛しながらも離婚した二人が、紅葉に染まる蔵王で、十年の歳月を隔て再会。そして、女は男に宛てて一通の手紙を書き綴る。往復書簡が、それぞれの孤独を生きてきた男女の過去を埋め、織りなす、愛と再生のロマン。香爐園駅近くのテニスコートや喫茶店が登場する。

【登場人物】

勝沼亜紀… 有馬と離婚、10年後、蔵王で再会する。

勝沼清高… 亜紀の息子

有馬靖明… 10年前に別れた夫。

瀬尾由加子… 10年前有馬と無理心中をし、死亡。

令子… 有馬に尽くす女性。

父が、私に再婚の話を持ち出したのは、あなたとお別れして一年が過ぎようとするころでした。私はその間、香爐園こうろえんの家にほとんど引きこもって暮らしていました。近くのマーケットでの買物も、育子さんにすっかりあずけて、夫の去った、いまは自分ひとりの部屋となってしまう二階の寝室の、庭に面する窓のところに腰を降ろし、まるで読み切ってしまう気もないまま、外国の長いミステリー小説に目を落したり、あなたの置き忘れていったレコードを聴いたり、ベッドにうつぶせて、時計の音に聞き耳をたてたりして、日を過ごしていたのです。

阪神電車の駅から家へと向かう道に沿って細い川が流れていましたね。あなたと正式に離婚してから二カ月ぐらいたったところだったでしょうか、あなたも御存知のあの川沿いの玉川書店が店をたたみ、そのあとに〈モーツァルト〉という名の喫茶店が出来たのです。六十歳ぐらいの夫婦者が経営する店で、モーツァルトの曲以外は店内に流さないという主義だということを育子さんが誰かから聞いたらしく、散歩がてら、その店で珈琲コーヒーでも飲んできたらどうかとしつこいくらいに勧めるのです。梅雨が終わって、陽差しの強い日でした。

途中、二、三人の顔見知りの奥様方と出逢であいましたが、軽く頭を下げるだけで、向こうが何か言おうとするのを無視して、眩まぶしい道を歩いて行きました。あなたに逢いたいと思いました。照り返しの熱気が、私の額や背中あたりに汗を滲じませてきて、かすかな眩暈めまいのようなものを感じたことを覚えています。あなたに逢いたい、私は何度も思いました。世間の目が何だろう。粉微塵こなみじんに割れた壺つぼでも、それがいったい何だろう。私をもっと大きな人間になればよかったのだ。私はあなたを許すことが出来たはずだった。夫が他の女に心を移すことなど、世間ではいっぱいあるではないか。自分を取り返しのつかないことをしてしまった。ああ、どうかしてあなたに帰って来て欲しい。そんなことを考えながら歩いておりました。暗に私たちを別れさせようとした父に憎しみを抱きました。そして見たこともない、しかももうこの世に存在しない瀬尾由加子という女性に対して、ざわざわと全身の血が波立つほどの憎しみを感じました。

〈モーツァルト〉は、避暑地でよく見かけるようなペンション風の造りで、外観も店内も茶色い木肌の美しさを強調して、まるで山小屋が一軒ぼつんと建っている、そんなふうな喫茶店でした。太い丸太をそのまま使って、わざと露出させた天井の梁はりにも、手作りで組みあげたような木の椅子やテーブルにも、よっぽど吟味して選び抜いたと思われるほどの味わいのある木目やら節の形が、小さいけれどもいかにもお金をかけて凝り抜いて造ったお店であることを感じさせました。

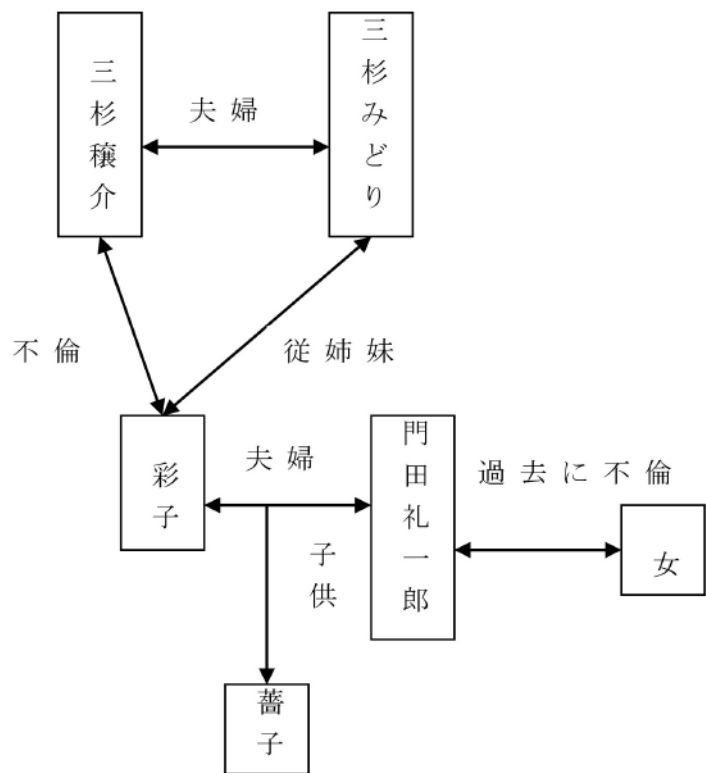
育子さんの言ったとおり、店内には、少し大きめの音量でモーツァルトの曲が流れていました。私も曲名だけは知っている「ジュピター」でした。お水をテーブルに置いた御主人に、「モーツァルトの曲しかかけないそうですね」と話しかけると、黒縁の度の強い眼鏡をかけた御主人は笑いながら、「音楽は好きですか?」と言いました。「好きですけど、クラシック音楽はよくわかりません」。私がそう言うとお主人は「私の店に一年間お越しになれば、モーツァルトの音楽がわかるようになります。モーツァルトがわかったら、音楽というものを理解したことになります」。銀色の大きなお盆を胸にかかえ、御主人は血色のいい顔を天井に向けて自慢そうに言いました。その言い方がおかしくて、私がくすくすと笑うと、御主人は「いまかかっているレコードは交響曲第四十一番です」と教えてくれました。私が「ジュピターでしょう?」と言うと、「なんや、ちゃんと知ってはるやないですか。そうです、ジュピター。四十一番ハ長調。モーツァルト最後の交響曲で、第一、第二楽章のソナタ形式を受け止めるために、最後の第四楽章でフーガを導入して強靱きょうじんなフィナーレを築きあげた傑作です」。そんな言い方でしばらく耳をそばだてていましたが、「さあ、これからですよ。これから最後の楽章に入りますよ」と声を忍ばせました。

私は珈琲ちゆうもんを注文して、モーツァルトの壮麗な交響曲に聴き入りました。そうしながら、店の中を見廻しました。モーツァルトの肖像画の複製が額に入れて飾ってあり、その横の小さな棚には、モーツァルトに関する何冊かの本が並べられていました。店の中にお客は私だけで、「ジュピター」が終わると、何やら吸い込まれていきそうな静けさが私を包んだのです。何という奇妙な静寂だったことでしょう。私はその静寂の中で、また、あなたに逢いたいと強く感じました。するとすぐに別の曲が流れ始めました。御主人がやって来て、学校の先生が幼い生徒に教えるような口振りでこう言いました。「これが二十九番シンフォニー。十六分音符の、奇蹟きせきのような名曲です。こんどお越しになったときは、ドン・ジョバンニをかけてあげましょう。その次は、ト短調シンフォニーです。だんだん、だんだんと、モーツァルトという人間の奇蹟がおわかりになってくるやろと思いますよ」。

『猟銃』

井上靖

より



【解説】

「1人の男性への3人の女性（不倫相手・男性の妻・不倫相手の娘（母親とは違って不倫関係は無い））からの手紙」を通して、4人の男女の、4者4様の複雑な心理模様を描き切った、恋愛心理小説。芦屋や夙川が舞台。

【登場人物】

三杉穰介 … 実業家

三杉みどり … 三杉穰介の妻

彩子 … みどりの従姉妹。三杉穰介の不倫相手

蕎子（しょうこ）… 彩子の娘。

門田礼一郎 … 医師。彩子の離婚した夫で、蕎子の父。

女 … 門田が過去に関係していた女。

おじさまと母さんの事で、もし予感と言うものがあるとしたら、蕎子にも一度だけ、そうした事がありました。それは一年程前の事です。お友達と一緒に学校へ行く途中、阪急電車の夙川まで来て、私は課外の英語読本を家に忘れて来た事を思い出したのです。そしてお友達に駅で待っていて戴いて、自分一人家に取りに帰ったのですが、家の御門の前まで来て、私は何故か門の中へ這入る事が出来なかったのです。その日朝からねえやお使いに出て居り、家の中には母さんお一人だけいらっしやる筈でした。しかし、母さんがお一人でいらっしやると言う事が、私は何故か不安だったのです。怖かったのです。私は御門の前に立って、躑躅の植込みを見詰めたまま、這入ろうか、這入るまいか、暫く考え込んでいました。結局英語読本を持って来る事はあきらめて、又お友達の待っている夙川の駅へ引返したのです。それは何故だか自分でも解らない不思議な気持でした。先刻私が学校へ行くため御門を出た瞬間から、家の中では、母さんお一人の時間が流れ始めた、そんな気持でした。もし私が這入って行ったら、母さんはお困りになるのだ、母さんは悲しそうな顔をなさるのだ、そんな気持でした。そして私は言いようのない孤独な気持で、芦屋川に沿った道を石を蹴り蹴り歩いて、駅へつくと、お友達の話しかけるのも上上の空で聞きながら、待合室の木のベンチに身を持たせかけていたのです。

こんな事は後にも先にもただの一度です。しかし、私は今この予感というものを無性に怖ろしく思います。ああ、人間はなんて嫌なものを持っている事でしょう。私が持ったこの何の根拠もない予感を、何時如何なる時に、みどりおばさまがお持ちにならなかったと断言できるでしょうか。トランプの時、相手の心をポインターよりも敏捷に嗅ぎ出す事が、何よりも御自慢のみどりおばさまが。ああ、思っただけでも怖ろしい事です。でもこれは蕎子の滑稽な杞憂にすぎないでしょう。総ては既に終って仕舞ったのです。秘密は保たれたのです。いいえ、秘密を保つために、母さんは亡くなられたのです。斯う蕎子は信じます。

あの思わしい日、母さんの短いが併し見えていられないような、あの烈しい苦悶が始まる直前、母さんは蕎子をお呼びになって、文楽のお人形のように妙にすべすべしたお顔をなさって仰言ったのでした。「母さんはいま毒を飲みました。疲れたの、もう生きて行くのに、疲れたの」

と。それは蕎子に仰言ると言うよりも、蕎子を通して神さまにでも仰言るような、不思議に澄んだ、天上の音楽のようなお声でした。前夜母さんの日記で読んだばかりの、あの、罪、罪、罪とエッフェル塔のように高く積上げられた罪の文字が、轟然と母さんの周囲に崩れて行く音を私ははっきりと聞きました。十三年間支えて来た何層かの罪の建物の重さは、今疲れきった母さんを、押し潰し、押し流そうとしているのでした。その時、放心したように母さんの前にべたんと坐って、母さんの遠いあらぬ方を見遣っている視線を追っていた私を、突如、谷から吹上げて来る野分のように、襲って来たものは怒りでした。怒りに似た感情でした。何ものかに対する言い知れぬ忿懣の、煮え沸いたような熱い感情でした。私は母さんの悲しいお顔を見詰めたまま、

「そう」

唯それだけ短く他人事のようにお返事しました。お返事すると、心はさあっと、水をかけたように冷たく冴えかえって来ました。そして自分でも愕く程冷静な気持で立上ると、お座敷を横切らず、水の上でも歩くような気持で長い鍵の手のお廊下を渡って行き（この時でした。死の濁流に呑まれる母さんの短い悲鳴が聞えて来たのは。）そして突当りの電話室に這入り、おじさまにお電話したのです。しかし、五分後にけたたましくお玄関から転げ込んでいらっしたのには、おじさまではなく、みどりおばさまでした。母さんは誰よりも親しい、そして誰よりも怖れた、みどりおばさまに手を握られたまま、息を引取り、そしてみどりおばさまの手で白い布片を、もう辛い事も悲しい事もお感じにならなくなったお顔の上にお載せになったのです。

『黄色い人』

遠藤周作

より

十二月五日

いつものことながら、私は毎朝、ミサにでかける道のりよりも、帰る道の方が、はるかに長く感ぜられる。今朝も教会をでた時、体はひどく冷えこんでいた。キミコが自分のスエーターをほどいて作ってくれた襟巻に顔をうずめながら、私は一週間前にふった凍み雪が闇のなかで銀色に光っている路をおりていった。まだ町はねしずまり、ひっそりとしていた。仁川橋まで来たとき、甲山から吹きおろす氷のような風が、物凄い勢いで顔にあたってきた。心臓の弱い私は顔を手で覆ったまま、しばらく石の手すりにもたれていなければならなかった。その時も……その時もまた、私はつぶった眼の奥で、自分の死んだ時の顔をはっきりと見たのだ。それは地獄にいく者の死相であった。

司祭であったころ、私はたびたび臨終の場にたちあつた。なくなつた堂本さん、斎藤夫人、それから私があつた頃「小さき花のテレジア」といつて、だれより可愛がつた鮎子ちゃんに終油の秘蹟をあたえたのは、この私である。あの人たちが、魂を天主に委ねた後の顔は、眉のあたりに、ほのかに暗い海のように、この地上のくるしみの翳を漂わせているだけで、もはや私たちの触れることもできぬ安息の静かさに包まれていた。

だが私のは違う。まぶたに浮んだ死相は、基督を裏切り、みずから首くつたユダの顔だった。それは……。

……もうよそう。このノートをキミコがみつける場合を考えて、私は今日から、この手提金庫の中に、あのブラウニングのピストルと一緒に入れることにした。

台所で今キミコが夜の食事の支度をしている。五年前、私がユダのように自殺するために手に入れたこの物体を、しばらくの間みつめていた。窓から斜めにおちる冬の夕暮の光に、それは重げに、にぶく光っていた。銃口がそこだけ、老人のうつろな、くぼんだ眼窠のように凹んでいる。湿気のこもつたあの日本の夏、私とキミコとは蛙の唄れた呻き声を窓の外にききながら、怖ろしい情慾の業にとり憑かれていた。営みが終り、司祭館に戻つてから私は、湿つたベッドに顔を伏せながら、この凹みを顛顛にいくたびも押しあてた。指は震え、まがらなかつた。死ねなかつた。

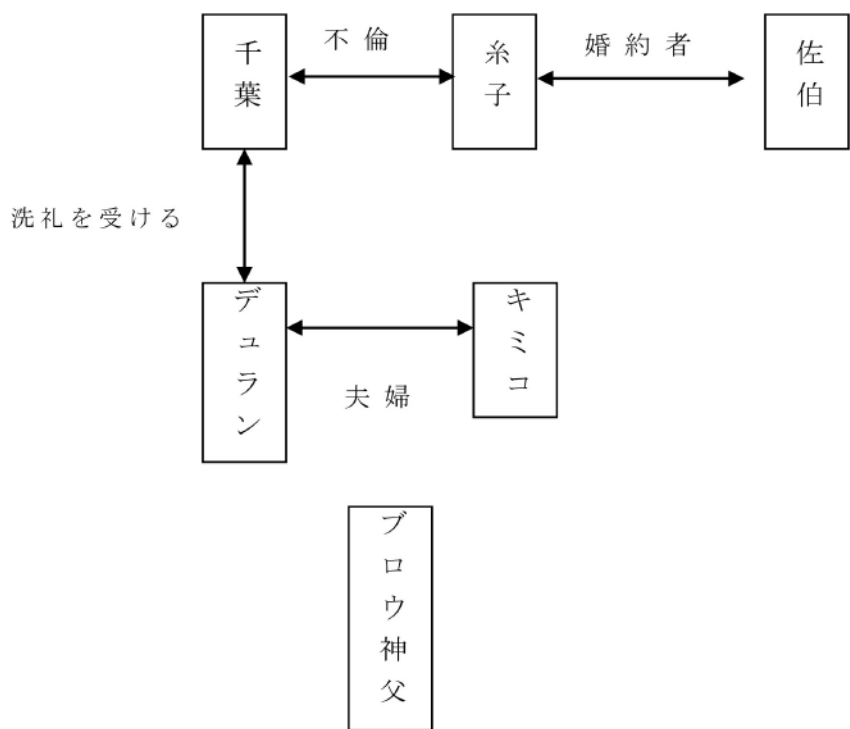
友人のブラウ神父のひそかな援助で、信者たちの眼をかくれながら、まるで生ける屍のように私はその後も生きつづけている。

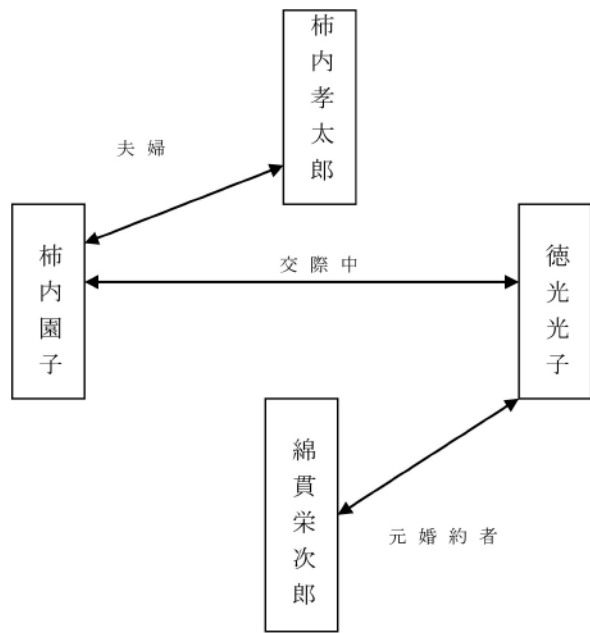
【解説】

太平洋戦争下、教会を破門になった神父と、彼を見つめる日本人青年の話。罪を犯しながらも偽りの告解を続ける青年、神の前に罪の重さに苦悩する神父。二人の心の変化を描く。仁川が舞台。遠藤周作氏が洗礼を受けた夙川カトリック教会も登場する。

【登場人物】

千葉 … 医学部の学生
糸子 … 千葉と不倫
佐伯 … 糸子の婚約者
デュラン … 破門神父
キミコ … デュランの妻
ブラウ神父





【解説】

香櫨園の海辺の家が、ヒロインの住む家に設定されている。夫に不満のある若い妻・園子は、芸芸学校で出会った光子と禁断の關係に落ちる。しかし奔放で妖艶な光子は、一方で異性の愛人・綿貫との逢瀬を続ける。光子への狂おしいまでの情欲と独占欲に苦しむ園子は、死を思いつめるが一。おたがいを虜にしあった二人の女が織りなす、淫靡で濃密な愛憎と悲劇的な結末を、生々しい関西弁（阪神言葉）の告白体で綴る。

【登場人物】

勝柿内園子… 夫がいながら徳光光子と交際している。

柿内孝太郎… 園子の夫。妻が光子と交際しているのを苦々しく思っている。

徳光光子… 園子と性的な關係を持っていながら、男性とも戯れる女性。

綿貫栄次郎… 光子と婚約していたが、彼女の同性愛の噂によって断念した。

そうそう、それからその時分にあのいつぞやの観音さんの絵エ出来上りましたので、それ夫にみせたことありました。「ふうん、光子さん云うたらこんな人か。お前にしたらこの絵エもう出来すぎてるなあ」と、夫は晩御飯のときにそれ畳の上い広げて、一と箸たべては見、一と箸たべては見いして、「これやったら、さも絵エにかいたようやけど、ほんまにこの通りかいな」と、あやしみなから念押ししました。「そろこの絵エ問題になつたくらいやもん、よう似てるわ。ほんとの光子さんはこの神々しさの上にちょっと肉感的なところあるねんけど、日本画にしたらその感じが出えへんねん」——その絵エわたし、大分骨折りましたので自分でどうも画けてる思いしました。夫はしきりに傑作や云いましたが、とにかくわたし絵エ云うもん習い始めてから、これほど一生懸命に、興味以って画いたことはあれしませなんだ。「いっその絵エ表具してもらたらどうやねん。そんでそれが出来上ってから、光子さんに見に来てもらたらええやないか」と、夫が云いますので、わたしもその氣イになりました、そんなら京都の表具屋いやつて立派に仕立てさせよ思いつながら、ついそのままに放ったあつた、或る日イのことでした。「実はこう云うつもりやねんけど」と、光子さんにその話したら「表具屋いやるくらいやったら、もう一べん書き直して見えへん？」——あれはあれでよう出来るけど、——顔はよう似てるけど、——体のつきがちよっとだけ違うよってなあ」云われるので、「違うて、どう云う風に？」、「どう云う風に云うたかって、口で云うたぐらいやったら分れへんわ」と、そない云われたのが、ただ自分の感じ正直に述べられたので、「わたしの体はもともと綺麗です」云うような自慢の意味はなかったのんですけど、でも何とどのう不満足に思うてなざる様子でしたので、「そんなら一べんあんたのはだかの恰好見せて欲しいなあ」云いますと、「そら、見せたげてもかめへんわ」と、すぐに承知しました。

そんな話があつたのんやっばり学校からの帰り道か何処ぞやっただんですやろ。「そんならあんたと、こい行て見せたげるわ」云われて、たしかその明るる日の午後、学校早退ぎして二人でわたしの家に来ました。「うち、はだかになつたりなんかしたら、あんたとこの人び、くくりしやはるやろなあ」と、みちみち光子さんは云うておられました、きまりわるがるより、なんぞ面白い遊びでもするように、やんちゃな眼エしておかしかつておられるのでした。「家にええ部屋あるわ。そこやったら誰にも見られへん、西洋間になつてよって」と、わたしはそない云うて二階の寝室に連れて行きました、「まあ、感じのええ部屋やなあ、とてもハイカラなダブルベッドあるなあ」と、光子さんはそのベッドに腰かけて、お臀にはずみつけてスプリングぐいぐい撓ましたりしながら、暫くおもての海のけしき見ておられました。——宅は海岸の波打ち際にありますので、二階はたいへんに見晴らしええのんです。東の方と、南の方と、両方がガラス窓になつてまして、それはとても明うて、朝やおそうまでは寝てられしません。お天氣のええ日イは松原の向うに、海越えて遠く紀州あたりの山や、金剛山などが見えます。はあ？——はあ、海水浴も出来るのんです。あそこら辺の海はちよっと行きますと、じきにど、かんと深うになつてますので、あぶないのんですけど、香櫨園だけは海水浴場出来まして、夏はほんまに賑やかやのんです。ちようどその時分は五月のなかば頃でしたから、「早う夏になつたらええのんなあ、毎日でも泳ぎに来るのに」と、部屋の中見廻しながら、「うちも結婚したら、こんな寝室持たいわ」などと云うたりしました。「あんたやったら、これどころやあるかいな。もともとええとこい行けるやないか」「そやけど、結婚してしたらどんな寝室に住んでも、綺麗な籠の中に入れられた鳥のようなもんと違つかしらん？」「そら、そんな氣イすることもあるけど、——」「あんた、此処は夫婦の秘密室やないかいな。わたしこんな部屋引張つて来て、旦那さんに叱られへん？」「秘密室かつてかめへんやないか。あんただけは特別やもん」「そない云うても、夫婦の寝室は神聖なもんや云うさかいに、……」「そしたら処女の裸体かつて神聖なもんやよって、ここで見せてもらうのが一番ええわ。今のうちやったら光線の工合もちようどええよって、はよ見せてほしいわ」私はそう云うて急ぎたてました。「海の方から誰ぞ見てはれへんやろか」「あほらしい、あんな沖の方にいる船から何が見えるもんかいな」「そやけど、ここはガラス窓やよってなあ。——」

そのカーテン締めてほしいわ」五月云うても眼エ痛うになるほどキラキラするお天氣でしたから窓はどころ開け放してありましたが、それすっかり締め切つてもうたので、部屋のなかには汗がたらたら流れるぐらいの暑さでした。光子さんは観音さんのポーズするのに、なんぞ白衣の代りになるような白い布がほしい云うので、ベッドのシーツ剥がしました。そして洋服箱の蔭に行て、帯ほどいて、髪ばらばらにして、きれいに梳いて、はだかのういそのシーツをちようど観音さんのように頭からゆるやかにまきました。「ちよっと見てごらん、こないしてみたら、あんたの絵エと大分違うやろ」そう云うて光子さんは、箱の扉に附いている姿見の前立って、自分で自分の美しさにほろ、ととしておられるのでした。「まあ、あんた、綺麗な体しててんなあ」——わたしはなんや、こんな見事な宝持ちながら今までそれ何で隠してなかつたのんかと、批難するような氣持で云いました。わたしの絵エは顔こそ似せてありますが、体はY子云うモデル女うつしたのんですから、似ていないのはあたりまえです。それに日本画の方のモデル女は体よりも顔のきれいなのが多いので、そのY子と云う人も、体はそんなに立派ではのうて、肌なんか荒れてまして、黒く濁つたような感じでしたから、それ見馴れた眼エには、ほんまに雪と墨程の違いのように思われました。「あんた、こんな綺麗な体やのんに、なんで今まで隠してたん？」と、わたしはとうとう口に出して恨みごと云うてしまいました。そして「あん